

Katja Centonze 著 *Aesthetics of Impossibility: Murobushi Ko on Hijikata Tatsumi*

ケイトリン・コーカー

舞踏という日本発祥の前衛的なパフォーマンス・ジャンルは、現在の日本では一般的に広く知られていないものの、近年では世界的に舞踏を巡る研究が盛んになりつつある。その例として、2018年の*The Routledge Companion to Butoh Performance*や2019年の『暗黒舞踏の身体経験—アフェクトと生成の人類学』の文献が挙げられる。60～70年代に隆盛し80年代に至って黄金期を迎えた舞踏が、なぜ未だに研究対象になりうるのだろうか。この背景には、2016年が舞踏の創始者土方巽の没後30年にあたり、2018年は土方巽による伝説的な舞台『土方巽と日本人—肉体の叛乱』50周年記念でもあること、また慶応義塾大学アート・センターの土方巽アーカイヴの研究活動や、そのアーカイヴを拠点とする研究団体 Perspectives on Hijikata Research Collective (POHRC) のワークショップ企画などもあるためであろう。この動きの中で特に海外の研究者が舞踏から衝撃や様々な示唆を受けて、度々来日している。

上記を背景にして出版された *Aesthetics of Impossibility* は、舞踏家室伏鴻の歴史と、思想、ダンス（原文：dance）、文章を包括的に研究するという、舞踏の先行文献における初めての室伏のキャリアに焦点を当てた一冊である。英文でたった85頁とはいうものの、そこには著者チェントンツェによる約20本の投稿論文、多数の研究発表、すなわち1998年からの舞踏研究が凝縮されており、たいへん読みごたえのある単行本である。

室伏は、1978年にパリでグループ作品、1980年にヨーロッパの各所でソロ作品を披露してヨーロッパに舞踏ブームを起し、1980年代から海外で舞踏ワークショップを頻繁に行い、舞踏を国際的に広めるのに重要な人物となった。本書は、室伏の活動を理解するに当たって肉体的な実践のみならず室伏の著述についても、その総合体として検討することが不可欠であるという。その作業は果てしないものであろうが、室伏が2015年に他界したこともあり、研究を発表する機会は今だと考えられる。

そこで、チェントンツェは室伏の舞踏作品と同時に室伏の著述を検討することで、室伏が残した知的かつ肉体的遺産を明示する。そのため土方の舞踏との関係性から見出せる、室伏のアンチ・ダンスとしての舞踏の要素を考察する。そしてチェントンツェは、室伏が60年代の舞踏の肉体的な革命を明瞭に編み出していることから、土方の「アンチ・ダンス」という過激なプロジェクトの傑出

した後継者であると論じる。

構成は、第1章の「肉体の叛乱—室伏から土方へ」と第2章の「土方から室伏へ」に分けられている。第1章は7節で構成されており、ここでは土方の舞台と著述について論じる。そして、15節で構成され本書の大半を占める第2章では、室伏の舞踏活動の歴史を取り上げる。以下に各章を紹介し、各節を要約する。

第2章で示唆されるように、室伏は土方の稽古を受けて舞踏作品に出演したという典型的な師弟関係をもったわけではない。室伏は主に土方のソロ作品および文章に触発され、自分自身の方法論で舞踏を考えて展開していった。第1章では室伏自身がいかに土方の作品を受け取ったのかというよりも、土方舞踏の特徴的な要素そのものを英語圏の読者に向けて35頁を割いて簡潔に提示する。以下その7節の概略を述べる。

第1章の第1節「ダンスの言葉、踊る言葉—肉体的な文学」では、室伏を「肉体的かつ理論的な哲学者」とし、室伏の著述が日本文学としても今後多くの貢献をしていくという（17頁）。第2節では1968年の土方のソロ作品『土方巽と日本人—肉体の叛乱』を室伏のダンスの道を歩む契機とし、体による遂行的な маниフェストであると論じる。「肉体の時代」とも呼ばれていた日本の60年代を背景に、その маниフェストはいかなる意味をもっていたのかについて述べる。

第3節はアメリカやヨーロッパの身体表現での「体（ボディ）」の概念と日本の前衛的なパフォーマンスでの「体（ボディ）」の概念との相違から、前者と後者の美学と構成は異なっていくと主張し、宇野邦一の論考を参照しながら肉体と身体、からだ、それぞれの特徴について述べる。第4節では、土方の言葉も肉体的であると論じ、書くという実践と踊るという実践との緻密な関係を示す。そのため、土方を研究するに当たっては、その二つの領域を検討することでダンスと言説との出会いへの洞察が深まると指摘する。第5節では、「テロ・ダンス」と呼ばれた土方舞踏は体を裸にして体に問いかけることで、社会制度に問いを投げかけたと言及する。第6節は土方舞踏では肉体と言葉のみならず、モノ（object）も重視されたと提示する。土方はモノのエイジェンシーすなわち他者に働きかける力を承認し、ダンスの人間中心主義的な傾向を拒否したと論じる。第7節は土方の著述が肉体と言葉や、肉体と主観的なアイデンティティ

等という二項対立構造を解消して、不屈の肉体を捉えようとしているのではなく、肉体と共に流れていると述べる。

第2章では、土方との出会いを室伏のダンスの出発点とし、それ以降の舞台作品と著述を総合体とし、室伏の舞踏活動の歴史について論じ、室伏が残した哲学と美学について考察する。以下第2章の15節を要約する。

第2章の第1節と第2節は室伏舞踏の政治的な要素を取り上げる。第1節は、室伏がダンスと肉体と死を合わせることで、肉体の危機を露わにして土方の1950～60年代の実験的な舞踏の政治的な要素を探求したと論じる。第2節は、室伏が大学生時代に実験的な芸術集団に参加したものの、土方との出会いによって肉体的な問いを模索するためには、ダンスが最も適切な方法であると感じたという点に着目する。ここで、Lepeckiのいうchoreopoliticsの集団的な特徴に対し、室伏が単独性を容認し行動したと指摘する。

第3節から第7節までは、山伏と修験道を通して室伏が発展させた方法論を扱う。第3節は、フーコーのいう「外」を参考に山伏の肉体の「外」への挑戦を描写する。その挑戦は両義的な位置に置かれている山伏および修験道の実践を通して実現されてゆき、さらに日本での「室伏鴻」と同時に海外での「Ko Murobushi」であるという両義性から齟齬を生じさせ「外」に向かうことになったと論じる。第4節は修験道の「ミイラ」と「即身仏」が室伏の舞踏の核たる要素となったことを指摘する。両者とも生と死との狭間に存在することで、体や個人に対する既成概念を覆す力を備えたものであり、室伏の肉体性の頂点となったと論じる。第5節は、「大駱駝艦」「アリアドネの会」「舞踏派背火」という舞踏集団での室伏の活動を明らかにし、室伏の1970年代の歴史を辿る。第6節は室伏の作品制作とジェンダーとの関係を検討する。具体的にいえば、演出の際に室伏は女性への指導に対し違和感を覚え、さらに女性と共にいることで自分自身の体に対し違和感があったという。第7節は1976年の舞台作品『虚無僧』を室伏が初めて正式に「ミイラ」を踊ったパフォーマンスとして注目する。室伏は「ミイラ」と土方のいう「はぐれている肉体」につながりを感じ、そして『虚無僧』を鑑賞した土方は室伏の舞台に「新しいミイラ」そして「新しい舞踏」を見出したという。

第8節から第11節までは、室伏の活動が国際的に広がっていった時期について言及する。第8節では室伏の振付・出演の作品『常闇形』、そしてその活動を「Lotus Cabaret」および「暗黒宝塚」と称したことを取り上げる。「Lotus Cabaret」と「暗黒宝塚」という名称が闇とユーモアを結びつけ、その活動は芸術的な実験を行うものであった

と指摘する。第9節は1978年にパリにて室伏が背火+MESUKAZANという形で『最期の楽園—彼方の門 (Le dernier Eden - porte de l'au-delà)』の初演を行ったことについて述べる。この公演を機にヨーロッパで日本の前衛的なダンスが広まり、ヨーロッパのダンスに多大な影響を与えたという。その成功を踏まえて舞踏が発祥地の日本に逆輸入されたことも指摘する。第10節は、室伏振付・出演の作品『ツァラトゥストラ』を扱い、室伏がニーチェを媒介にしてツァラトゥストラを死と生、西洋と東洋との間に存在するものとしたと述べる。第11節は1980年代から1990年代に渡る、室伏が海外でソロ活動を行いつつ国際的な舞踏カンパニーも設立した時期に焦点を当てる。この活動の結果、室伏の海外での影響力が増し、舞踏の最も代表的な存在として紹介されており、1990年代末から国内でも舞踏を目指すダンサーのみならず、幅広い表現者に影響を与えたと述べる。

第12節から第15節までは、室伏の美学の最終的結晶を取り上げる。第12節は1990年代末から2000～10年代の活動を扱い、その作品群においては室伏の非合理性と反乱、枠を拒否する単独性がさらに形成されていったと論じる。ここでは、室伏の脱人間中心主義的な舞台は情動を排除し、有機体と無生物との境界を行き来する肉体に注目したとする。第13節は、2007年にイタリアのレッチェで著者自身が企画したプロジェクトでの室伏のパフォーマンスを取り上げる。そのプロジェクトは肉体の概念や既存のダンスを覆すことを視野に入れたものだそうだが、室伏のパフォーマンスで最も印象深かった、室伏の肉体とそのレッチェの空間の肉体との衝突について考察する。第14節では、「taoreru (倒れる)」と「keiren (痙攣)」を室伏のダンスの基本的な動作として扱う。動的でもあり不動的でもあるという矛盾は、室伏のダンスの特徴であり、そこにはダンスと身体そのもの、または社会規範からの逸脱が見出せると論じる。第15節は、室伏を芸術的な活動家とするが、室伏の活動はある目的に向かった政治的なものではなく、舞踏・ダンス・人間という概念および自分自身の身体に対するテロ、自分が所属する国体への侵食、つまりあらゆるリミットに反抗する遊撃戦であると主張する。

本書の冒頭(18頁)と末尾(85頁)では、ドゥルーズのいう常にかけられていく蜘蛛の巣を参照し、室伏の踊る・書く遊撃戦を終わりのない不可能性の糸をつむぐものとする。その作業は永遠に継続し、室伏が他界しても結論づけられるものではないと考えられる。著者はこれからも室伏の不可能性の糸、室伏の美学と哲学を解いていく作業を続けていくのだろう。

(Libreria Editrice Cafoscarina, 2018年3月刊行)